【主題】　学校を拠点にした地域総掛かりの地域づくりの実践
【副題】　15 年後を想像し、地域住民主体のコミュニティを学校内に創出する

佐渡市立畑野小学校
校長　五十嵐　和彦

１　はじめに

新潟県内では極めて珍しい「学校を拠点にした地域総掛かりの地域づくり」の実践である。

「子どもたちには、畑野地区に愛着と誇りをもってもらいたい。」「朱鷺のごとく羽ばたいた後、再び畑野に帰ってくる子どもたちを育てたい。」その一念で本実践に着手した。

15 年後の佐渡畑野地区の未来に思いを馳せ、当事者意識をもった地域住民主体のコミュニティをいかに学校に創出したのか。コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に展開したその背景と実践等を明示する。

２　佐渡市畑野地区の現状

今の中学２年生の半数が107歳まで生きると言われている少子高齢時代である。

日本は、2060 年には、高齢者が総人口の約 40%を占め、さらに高齢者の 34%（総人口の 13%）が認知症になると言われている。佐渡市はすでに高齢者の割合が 40%を超えているため、佐渡市も総人口の 10%以上が認知症であることが予想される。この割合は、畑野地区でも同様であろう。

	０歳～14 歳	15 歳～65 歳（生産年齢）	65 歳以上（高齢者）
昭和４５年	1,590 人	4,470 人	980 人
令和２年	429 人 約 73%減	1,837 人 約 59%減	1,768 人 約 80%増

【 佐渡市畑野地区の年齢３区分の人口　約 50 年前と比較 】

畑野地区はこの 50 年間で、人口が 7040 人から 4034 人に減少した。43%もの人口が減少したのである。しかし、高齢者は 80%以上増加し、畑野地区での高齢者が占める割合は 49%にものぼる。つまり、畑野地区の２人に１人が高齢者なのである。

年度	児童数（人）
令和４年度	178
令和５年度	163
令和６年度	160
令和７年度	149
令和８年度	134
令和９年度	128

畑野小学校は、後山小学校と小倉小学校との統廃合により 10 年前に新生畑野小学校が創立した。

上記は、今後５年間の当校の児童数の推移を示した表である。

畑野小学校の児童数は、毎年およそ 10 人ずつ減少する。

さらに、進学・就職等を希望している佐渡市の高校生のうち、80%以上が島外での進学・就職を希望している現状がある。

今春、校長室にお越しになった地域住民がこんなことをつぶやいた。

「新穂にはトキがある。相川には金山がある。両津には港がある。南部には独特の文化がある。だけど、畑野には何もない。」

たしかに、畑野のメインストリート沿いの商店街に賑わいはなく、買い物等で出歩く地域住民の姿はほとんど見かけない。まさにシャッター通りである。

人と人との「つながり」は希薄になり、学校教育・子育てにおける問題は深刻化し、子どもたちの規範意識は低下の一途をたどる。さらに地域の伝統文化は衰退し活力を失う。畑野地区にも待ったなしでその時代がやってくる。

そのとき、学校を拠点にしてどのようなコミュニティがつくられているかを今から考えておかねばならない。

３　コミュニティ・スクールとは

平成 27 年 12 月 21 日 中央教育審議会（答申）「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」は、政策文書としては珍しく、それぞれの関係者の思いのこもった文体が小説のように綴られている。本答申最後の５行は、下のような熱い思いで

締めくくられている。

誰かがなんとかしてくれる、のではなく、自分たちが「当事者」として、自分たちの力で学校や地域を創り上げていく。

子供たちのために学校を良くしたい、元気な地域を創りたい、そんな「志」が集まる学校、地域が創られ、そこから、自己実現や地域貢献など、志を果たしていける未来こそ、これからの未来の姿である。

本答申の分科会委員を務めた、東京大学大学院教授の牧野篤氏は、下のように本答申への思いを述べている。

答申の核心は、学校との協働だけではなく、学校を活用しながら、地域コミュニティを住民自らが経営して、自治を高めていくということだといえます。（中略）住民は常に「学び」続け、他者との関係を相互の承認関係へと組み換え続け、自分の住むコミュニティを常に新たなものへと変革し続けることが求められます。

月刊公民館 2016年２月号より

さらに、平成27年３月４日　教育再生会議第六次提言の「『学び続ける』社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について」では、コミュニティ・スクールの観点を次のように示している。

教育がエンジンとなって地方創生を成し遂げる必要があるという理念の下、**学校は、人と人をつなぎ、様々な課題に対応し、まちづくりの拠点としての役割が求められる。**

４　コミュニティづくりに係る留意点等

（１）　持続可能なコミュニティにするために

学校を拠点にしたコミュニティを当校でいかに創出したか。その留意点を６点述べる。

① 地域住民の主体的な活動を展開することにより、持続可能な取組とした。

学校主導では、管理職や担当者が異動することで活動が停滞したり、衰退したり、活動そのものがなくなってしまったりする。

学校は、地域住民の自治的・自主的な活動を展開するためのきっかけづくりや啓発活動・支援活動を行った。

② 人を巻き込み、呼び込むための重要な要素である「娯楽性」「受益性」を大切にした活動とした。

コミュニティをつくっても、人は簡単には参加しない。人は社会的ジレンマを抱えているからである。

人の性格はなかなか変えることはできないが、行動を変えることはできる。その行動変容に必要な「娯楽性」と「受益性」を重視したコミュニティを創出した。

③ 教職員には地域住民主体のコミュニティに無理して教育活動等に生かすよう働きかけたり、児童に交流を勧めたりはしない。コミュニティ運営側も無理のない普段通りの活動を展開した。

持続可能な地域住民主体の活動を展開するためには、学校も地域住民も「無理」は禁物である。

新たな活動は無理して創出しようとはせず、普段の活動をそのまま学校を拠点にして行ってもらうよう働き掛けた。

④ 地域コーディネーター等と連携・協働して、様々な立場の方、人知れず悩んでいる方（特に、社会的弱者と言われている方）のコミュニティをあえて創出した。

「いつも同じ人しか集わない。」これは、コミュニティ創出の課題である。

同質のコミュニティは持続可能な活動の展開を阻むと言われているため、あえて当校でもマイノリティの方々をコミュニティに巻き込み、コミュニティに参画してもらうよう積極的に働き掛けた。

⑤ 「地縁型コミュニティ」ではなく、「橋渡し型コミュニティ」を構築した。

コミュニティの「結束」の性格が強すぎると、閉鎖性・排他性につながりかねない。これに対して「橋渡し型」は、より弱くより薄い関係性が保持されるが、より開放的・横断的であるため、コミュニティの発展や民主的なパフォーマンスが向上する。

さらに、あえてコミュニティ同士のネットワークは結んではいない。ネットワークを結ぶことで、コミュニティを排除したり、無理して結ぼうとすることが負担となったりするためである。

⑥ 地域主体のコミュニティ創出のための、民間団体・企業・行政への積極的な訪問と啓発活動を行った。

「学校を拠点にした地域総掛かりの地域づくり」の趣旨説明と協力依頼のために、民間団体、企業、行政に自ら積極的に出向いた。

趣旨に賛同してくださった方々には、機を逃さずにコミュニティを打ち込んでもらうよう働き掛けるとともに、お越しになった方に新たなコミュニティをつくってもらうための啓発活動をも行った。

（２）　校長が学校施設の利用を許可するときの留

意点

「学校の管理運営」でも示されている下の６点には十分留意し、地域コーディネーター等と連携しながら活動を展開している。

① 学校の正常な運営を場所的・時間的に妨げないこと
② 学校施設の損傷など、施設管理上不都合を生じないこと
③ 公益を害するおそれがないこと
④ 私的営利を目的に使用するものでないこと
⑤ 当該学校の教職員に過重な負担をかけないこと
⑥ 経済上の問題を生じないこと

（３） 地域学校協働本部について

佐渡市内の全義務教育諸学校には、コミュニティ・スクールが導入され、地域学校協働本部が校内に設置されている。

当校を拠点にしたコミュニティは、地域学校協働活動として展開している。よって、本活動の主催を地域学校協働本部とすることで、学校の施設設備等を利用する際の地域住民等による申請手続等は一切必要としない。

５ 当校に創出したコミュニティの実際

当事者意識をもった地域住民主体のコミュニティの概要を明示する。

下線部は、学校教職員・児童への支援や教育的効果を示す。

（１） 畑小サロン

毎月第１・３火曜日の午前９時 30 分から 11 時 30 分まで開設している。

畑野地区の「お茶の間サロン」の活動をそのまま校内で展開している。

高齢者は、コーヒーを飲みながら、折り紙を折ったり、布でマスコットを作ったり、読書をしたり、談笑したりしている。休み時間には児童と高齢者が交流している。児童にとって評価者ではない地域住民との交流は、児童の癒やしの時間となり、心身の解放につながっている。

（２） ひだまり

長期休業中に、高校生や地域住民と一緒に勉強したり、遊んだりして交流を図った。本活動は、畑野地区社会福祉協議会が主体となって活動している。

高校生等との交流を通して、児童は「憧れ」の念を抱いたり、将来の自分の姿を想い描いたりしたようだ。

（３） 畑小アミー

毎月３回程度、地域の障がい者就労施設で働く障がいをおもちの方々が来校し、当校を作業場にして普段どおりにお仕事をしたり、レクレーションの折り紙をしたりしている。休み時間等には体育館で児童と一緒に遊んでいる。

障がいをおもちの地域住民と同じ空間で、同じ空気を吸い、交流することで、児童は次の４点を学んでいると思われる。

① 地域・社会には様々な方が生活していること
② 生きづらさを抱えている方に思いを寄せること
③ 学校や地域は多様性に寛容な社会であること
④ 皆、同じ人間であり、一人一人の人権を大切にしなければならないこと

（４） しめなわサロン

毎週月曜日と金曜日に開催している。

佐渡文化財団の活動である「しめ縄づくり」を校内で展開している。

休み時間には、地域住民と児童とが一緒に「しめ縄づくり」をしたり、楽しく遊んだりしている。畑小サロン同様、地域住民との交流は、児童の癒やしの時間となり、心身の解放につながっている。

（５） 畑小クックの日

毎月第２水曜日に活動している。

学校事務職員と地域コーディネーターが活動のきっかけづくりを行い、地域住民を対象にした料理教室兼コミュニティ・カフェを運営している。さらに、幼少のお子さん連れの保護者への家庭教育支援活動も展開している。

（６） 畑小ネイルホッと

毎月第１木曜日に開催している。

認知症の方、在宅介護でケアしている方、ケアを受けている方、介護等でお悩みの方やお疲れの方、子育て中の保護者等を対象にしたネイルサロンとコミュニティ・カフェを校内に開設している。

民間企業にお勤めの方がボランティアで参加し、食事や運動等の健康管理に係る相談にも対応する。

児童は、畑野地区に住む要介護の高齢者や認知症の方の存在を肌で感じつつ、それを受け入れる地域・学校に誇りを感じてくれるだろう。さらに、子育て中の保護者等がネイルデザインを通じて、安らぎを感じつつ、交流を図ることは家庭教育支援につながっていると確信している。

（7）さどママトーク

乳幼児を子育て中の保護者・地域住民の皆さんが主体となって立ち上げたコミュニティである。

毎月３～４回程度、不定期で開催している。

休み時間には、乳幼児に触れたい児童が部屋を訪れ、母子と児童が交流を図っている。とても温かい心安らぐ空間が広がっている。

（8）どんぶり広場

毎月１回、週休日に開催している。

地域コーディネーター、地域住民、社会福祉協議会が主体になって行っている「子供食堂」のような活動である。

子どもたちは、高校生ボランティアと一緒に遊んだ後にカレーを食べる。大人はカレーを作って食べた後は、哲学対話をしたり、ボードゲームで楽しんだりしている。

佐渡初の LGBT 当事者の方のコミュニティも創出した。

（9）　その他

地域住民主体のコミュニティに集った方々から、学校は諸々支援を受けている。

その一部を列記する。

① お茶会

業務多忙の教職員の現状を知った茶道の先生が、教職員のリフレッシュのためにと、２月に１回お茶をたててくださっている。

② 交通安全立哨指導

毎日、児童の登校時の交通安全指導に当たっていただくお願いをした。快諾いただき、毎日立哨指導していただいている。

③ 金魚・メダカ、水槽の寄付

委員会活動で飼育している魚の数と種類が少ないため協力依頼をした。金魚・メダカ、水槽を寄付いただいた。

④ 版画展開催

畑野地区在住の佐渡版画村の理事長にお願いして、校内に「佐渡版画村会員版画展」を開催する予定である。

⑤ バドミントン教室開催

ほぼ毎日のお昼休み、地域住民が子どもたちにバドミントンの楽しさを指導してくれている。

⑥ 運動会の音響設備

当校には、グラウンドに響く音響設備がないため、音響装置に詳しい方に設置のお願いをした。

⑦ 伝統芸能指導

次年度、畑野「安寿天神祭り」で披露する「春駒」と「畑野音頭」の指導をしていただくことになっている。

平成 27 年 12 月 21 日 中央教育審議会（答申）「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」では、地域と学校の連携協働の活動には次の課題があると指摘している。

① 一部の限られた参加者
② 限定的な活動内容
③ 持続困難な体制
④ 関係者間の連携
⑤ 人材の発掘
⑥ 発展途上の地域活性化

当校での本実践「学校を拠点にした地域コミュニティの創出」は、これらの課題を克服するものと確信している。

５　おわりに

人は、学ばずには居られない存在であり、社会で生きる我々は、社会に恩を送ろうとする存在であると言われている。高齢者、体の不自由な方、認知症の方、人知れず育児に悩む保護者、若者、障がい者、外国籍の方等々、地域住民が集って生きがいを見出し、趣味や娯楽に興じ、学ばずにはいられない場があり、そして恩を送り合う。そんなコミュニティが必要不可欠である。

当事者意識をもち、主体的にコミュニティに参画する地域住民の後ろ姿を見た子どもたちは、社会の一員としての自覚を育む。そして、「私たちの学校・地域は多様性に寛容で、地域住民が生きがいを持って暮らしている。」と、畑野地区に愛着と誇りを抱くものと確信している。

繰り返すが、少子高齢化と人口減少の勢いは増すばかりである。待ってはくれない。早く手を打ち、学校を拠点にしたコミュニティづくりに着手すべきと考える。

畑野地区の子どもたちの多くは、きっと外に出て羽ばたくことでしょう。しかし、畑野地区に愛着と誇りをもった子どもたちは、きっとまた畑野に戻ってきてくれると信じ、本実践をさらに拡充すべくさらに尽力する。

資料１　学校を拠点に創出したコミュニティの様子

【畑小サロン】
　休み時間になると、子どもたちが地域住民と一緒に、トランプをしたり、おしゃべりしたり、折り紙を折ったりしている。
　地域住民の皆さんは、「久しぶりに子どもの声を聞いて元気が出た。とてっも嬉しかった。」とお話しくださって

【ひだまり】
　長期休業中、高校生や地域住民の方と一緒に宿題・課題をやったり、体育館で遊んだりした。
　憧れの対象である高校生に褒めて認めてもらうことで、子どもたちは自信に満ちた表情を浮かべていた。
　冬休み・春休みにも実施する予定である。

【畑小アミー】
　障がい者就労施設で働く方々が折り紙を折っている様子である。月に３回程、施設で行っているレクレーションをそのまま学校で行っていただいた。
　折り紙を折った後、体育館で子どもたちと一緒に遊んだり、図書室で読書したりした。
　障がいをおもちの方々は、「久しぶりにボール運動をやって楽しかった。」と喜んでくださっていた。

【しめなわサロン】
　佐渡文化財団の就労準備支援事業の一環で行っている「しめ縄」づくりを学校で行ってもらっている。
　様々な理由で就労できなかったり、他者との関係づくりが困難だったりする方々が集っている。久しぶりに子どもたちの声を聞いて、元気をもらったと喜んでくれていた。

【畑小クックの日】

幼少のお子さんを抱える保護者、外国から移住した保護者、不登校児童の保護者、地域との関わり・つながりがない方、地域住民等が参加して行われた。

インドネシアから結婚を機に佐渡畑野地区に移住している方は、保育園児３人のお子さんがいる。

「親しい友人ができず、なかなか外に出てリラックスすることもなかったので、こういうコミュニティに参加できて嬉しい。」

と話してくれた。

特別支援学級在籍で、昨年度はほぼ全欠の児童とその保護者が参加した。担任の働き掛けに応じて参加した児童は、地域住民と終始和やかに会話したり、自ら仕事を見つけて進んで調理したりしていた。

「今日、参加してとても楽しかったです。自分で作ったスイーツは最高に美味しかったです。」

【畑小ネイルホッと】

保護者でありプロのネイリストが施術している。

管理栄養士であり、ケアマネージャでもある保護者の支援もいただいている。

毎回、子どもたちは興味津々で来室している。

【どんぶり広場】

左：高校生ボランティアと遊んでいる子どもたちの様子

中：みんなでいつものカレーを食べている様子

右：大学生以上の大人が食後の哲学対話の様子

【さどママトーク】

当校の図書館司書が、とびこみで「読み聞かせ」することもあり、いつも大盛況である。

子どもたちも赤ちゃんと交流することで和やかな表情を浮かべている。

資料２　コミュニティに集った方からいただいたご支援

【お茶会】
　２か月に一度、教職員を対象にお茶会を開いている。もちろん講師は、コミュニティにお越しになったお茶の先生である。
　少しだけ厳かの雰囲気の中、普段滅多に口にしない抹茶と和菓子に舌鼓を打ちつつ、「癒やし」のひとときをいただいている。
　職員に大好評である。

【バドミントン教室】
　元インターハイ選手であった方から子どもたちにバドミントンの楽しさを教えてもらっている。
　ほぼ毎日、お昼休みにお越しいただき、多くの子どもたちが楽しくバドミントンで遊んでいる。
　児童の異学年交流の拡充にもつながっている。

【畑小水族館】
　ＪＲＣ委員会に所属している児童が、たった２匹の金魚のお世話をしていた。
　２匹だけでも、愛情をもって飼育して可愛がっていた。
　そんな児童の姿を見て、もう少し魚を増やすことができないかと地域住民に相談したところ、数種類のきれいなメダカ、水槽、飼育用具等の全てを学校に寄付してくださった。
　毎日のように、多くの児童がメダカの様子を見に集まったり、地域住民や教職員の憩いの場にもなったりしている。